

# 臨死体験後に辿る過程

—臨死体験者と日常への復帰—

岩崎 美香 (明治大学大学院情報コミュニケーション研究科)\*

The process of after near-death experiences:  
Near-death experiencers and their rehabilitation

IWASAKI Mika

## I. 問題と目的

### 1. はじめに

臨死体験 (near-death experience) は、変則的体験 (anomalous experience)<sup>1)</sup> の一種であり、何らかの危機に遭遇し、通常の意識レベルが低下している状態で生じる、超越的で神秘的な要素を帯びた体験である<sup>2)</sup>。その体験内容には、文化的、個人的背景を越えた共通性がみられる。臨死体験は、体験された内容が本人に鮮烈な印象を残すだけでなく、臨死体験の後にも、事後効果 (aftereffects) と呼ばれる様々な変化が生じるなどする。

筆者は2008年から日本人の臨死体験について調査してきた。本稿のテーマである臨死体験後については、死生観の変化、人生観や価値観の変化、身体的・生理的な変化、超常的な感覚の出現といった事後効果が確認されている。その結果に基づいて、以前本誌でも、臨死体験者に特に顕著だった一人称の死生観の変化に焦点を当てて論じてきた (岩崎, 2013)。

調査対象者からは、臨死体験後に死の恐怖が

減少した、生きることが拡充したなどのポジティブな側面も多く語られたが、それだけが全てではない。時には次のようなことも耳にした。たとえば、自分が体験したことは何であったのか理解できず、人に話すこともできず一人で長い間抱え込んでいた。また、臨死体験で世界の根本に触れるような素晴らしい体験をしたが、その後の一時期は光と影が同居する状態に苦悩した。さらには、臨死体験の後に、不思議なことばかり生じることに戸惑った。あるいは、異なった世界を感じる取る感覚が開かれたことによって社会生活を営むのに困難を覚えた等である。インタビュー時には健康で社会的にも活躍されている方々から、このようなことが語られたことによって、臨死体験後に辿る長い過程があることを垣間見るに至った。本稿では、これまでほとんど取り上げられることがなかった臨死体験後のプロセスについて検討していく<sup>3)</sup>。

## 2. 研究の背景

### (1) 臨死体験後への注目

臨死体験を本格的に研究しようという動きは1970年代から欧米を中心に生じ、レイモンド・ムーディの著作『かいまみた死後の世界』がアメリカでのベストセラーとなったことで、この分野への関心と研究への取り組みが加速していった。臨死体験一般の研究史については以

\* 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1  
iwskmk007@ybb.ne.jp

前に本誌でレビューしているので繰り返さないが、ここで本稿の検討課題である臨死体験後に関する研究について概観していく。

臨死体験について、当初は体験内容に共通性があるという事実が注目を浴びたが、臨死体験の後にも体験者には特徴的な変化が生じることが知られるようになっていく。ムーディは、「人生の目的が新しくなった」「喜びや愛情に目を向けるようになった」「直観力が鋭くなった」「死を恐れなくなった」などの臨死体験者の声を取り上げている (Moody, 1975/1989a)。臨死体験後の変化は、「事後効果 (aftereffects)」と呼ばれ、80年代になると統計的な調査がなされる。主要な事後効果として、内面的な宗教性の高まり、死後の生命の存続への確信、死への恐れへの減少、他者への受容性の増大、物質主義や競争主義が弱まる等が提示された (Ring, 1980/1981, 1984; Sabom, 1982/2005; Noyes, 1982/1991; Flynn, 1982/1991)。また、心理的な変化だけではなく、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚といった五感の鋭敏化や、透視能力、テレパシー、未来予知、霊的な存在の感知、ヒーリング能力など、超常的感覚の出現といった感覚の変化も報告されるようになっていく (Ring, 1984; Atwater, 1988/1998, 1994/1997)<sup>4)</sup>。特にアトウォーターは、臨死体験者からの聞き取り調査で多岐にわたる事後効果を捉え、臨死体験者が抱える困難も含めて取り上げている<sup>5)</sup>。この頃から臨死体験後に関して、変化がもたらした新しい価値観によって周囲の人々の間に生じる齟齬や、生理的・感覚的变化によって日常生活に苦痛を生じるなどの困難が生じることも認識されるようになっていく。

このような背景のなかで、80年代後半国際臨死体験学会 (International Association for Near-Death Studies = 略称 IANDS) は、“Journal of Near-Death Studies”誌上で特集を組み、ケア提供者が臨死体験者に接触や治療的介入を行う際

の注意点や推奨される対応などをガイドラインとして提示した (Greyson & Harris, 1987)。また異文化間セラピーからの知見を援用した臨死体験者向けのケアやサポートを提案する (Furn, 1987a, 1987b) など、臨死体験後へのケアやサポートを検討する試みを行った。

その動きとも連動して、臨死体験は精神的な変容のプロセスの始まりとしても捉え直されていく。Grofらは、臨死体験を変容の危機であるスピリチュアル・エマージェンシーの誘因のひとつとして挙げ、臨死体験者が超自然的な世界に触れて新しいスピリチュアルな視野や価値や目標を持って戻ってくる一方で、それが臨死体験以前に現実について抱いている信念と根本的に対峙する体験であることや、全く準備のない人々に突然、深いシフトを引き起こすと指摘した (Grof, S & Grof, C, 1989, 1990/1997)。事後効果及び困難はこうした変容のプロセス上にあるものとしても理解されるようになった。

2000年代になると、事後効果や困難を含んで展開する臨死体験後のプロセスが徐々に具体的に示されていく。オランダで心停止から蘇生した臨死体験者に実施されたコホート調査からは、事後効果の発現に数年を要するプロセスがあることが明らかにされた。その背景には、臨死体験への社会からの冷淡な態度があるとし、社会的な困難によって、臨死体験はそれを体験した人に徐々にのみ受容され統合されていくと指摘された (Lommel, Weeb, Meyers & Elfferich, 2001)。

また、国際臨死体験学会が臨死体験者に向けて実施した「臨死体験後に直面する困難」に関する調査研究は、臨死体験者たちが抱える困難を通してプロセス展開の主要部分に肉迫している。すなわち、臨死体験後には、(1) 現実の根本的な転換を扱う、(2) 戻ってきたことを受け入れる、(3) 体験を分かち合う、(4) 新しいスピリチュアルな価値基準を世俗的な期待と統

合する、(5) 高まった感受性と超常的な能力を調整する、(6) 目的を見出して生きる、という6つの困難領域がみられ、それぞれの領域の困難に対してどのような事後効果と関連しているか、困難に臨死体験者がどのように対処しているかも併せて報告された (Stout, Jacquin & Atwater, 2006)。

このように2000年以降は、事後効果や困難を個々のトピックとして取り上げるだけにはとどまらず、事後効果や困難の相互的な影響関係など臨死体験後のプロセスに相当する事柄が提示されてきた。断片であった臨死体験後が少しずつ形を取り始めており、プロセス全体のさらなる検討が待たれる。

## (2) 日本における臨死体験後の研究

近代の民間伝承を収集した柳田国男の『遠野物語』(1910/1989)には、花園の中で、亡くなった近親者に会い、その後、呼び戻されて息を吹き返すといった逸話が記されているが、臨死体験は日本人には比較的なじみ深い現象であった。

欧米の臨死体験研究が日本に紹介されるようになった80年代半ば、このような体験にあらためて光を当てようとする動きが起こり、松谷みよ子は「あの世へ行った話」の一環として、市井の人々の臨死体験談を広く収集し編纂している (松谷, 1986/2003)。

90年代以降には、臨死体験の内容だけでなく、臨死体験の後についても言及されるようになる。ノンフィクション作家の立花隆は、欧米の臨死体験研究の成果を幅広く網羅する一方、日本人の臨死体験者へのインタビューを精力的に試みている。そして、臨死体験の後に、死の恐怖が減少した、あるがままの現実を受け入れるようになった、生きることになったなどの心理的变化や、予知的な感覚やヒーリング能力などの超常的感覚の出現がみられたことを取り上げている (立花, 1994a/2000a,

1996/2001)。

また、臨死体験が歴史的に日本人の宗教文化や死生観に大きな影響を与えてきた可能性があることを指摘した宗教学者のカール・ベッカーは、現代日本人の臨死体験の研究にも意欲を注ぎ、死の恐怖がなくなり、生により深い意味を見出す、といった臨死体験者の価値観の変化に着目している (ベッカー, 1992; ベッカー・野堀, 1992)。

90年代後半になると、大学病院で対照群を用いた研究も行われ、山村尚子は、臨死体験を持った患者群は、臨死体験を持たない患者群とを比較して、死に対する不安や恐怖がない、もしくは極めて少ないという結果を発表している (山村, 1998)。このように、90年代は日本での臨死体験研究が発展した時期であり、日本人の臨死体験の事例が集積されるとともに、事後効果に関するトピックが検討された。

2000年以降、日本での臨死体験研究はやや空白の時期が続いたが、その後、臨死体験後のプロセスを取り上げるような新たな視点からの研究も提示されている。柿原有一は、臨死体験から認識されるに至った超越性を有する意識と、それとは別の論理で構成されている日常の意識とが、臨死体験後に統合に向かうとする様相について論じた (柿原, 2006, 2008)。柿原の論考は、主に欧米の先行研究の臨死体験事例に立脚したものであるが、臨死体験による超越性に触れることの創造性と困難の両方を視野に入れながら、日常への復帰の際に臨死体験者が直面する問題の解決策までが示されるなど、臨死体験後のプロセスへの視点を打ち出している。ただし、臨死体験者が直面する困難に対して提示された対処法は柿原の統合理論に基づく仮説モデルであり、実際の臨死体験後のプロセスとどれくらい一致しているのか検証する余地が残されている。臨死体験後のデータの集積とそれに基づくプロセスの実態の解明が目指される。

### 3. 研究の目的

日本人の臨死体験研究では、臨死体験後についてはこれまで事後効果を中心として取り上げられてきた。本研究では、事後効果や臨死体験後の困難を個々にトピックとして扱うことから転じて、日本人の臨死体験事例に基づき臨死体験後のプロセスを考察していく。

こうした試みは、これまでほとんど明らかにされてこなかった日本人の臨死体験後についての研究を一步前進させるとともに、臨死体験をした当事者が臨死体験後にどのように日常を生きるのかということに見通しをもって対応する手がかりを提示することにもつながると考えている<sup>6)</sup>。

## II. 方法

### 1. 研究手法の選択

臨死体験の出現の割合は、一定の意識レベルの低下に陥った人では約4割 (Ring, 1980/1981; Sebom, 1982/2005; 山村, 1998)、心臓停止のみに限定すると約2割 (Lommel, at al. 2001) と報告されている。臨死体験者の絶対数は決して多くないと考えられるため、調査は特定母集団を設定せず、スノーボール・サンプリングによって国内に在住する日本人の臨死体験者を探し、一人ひとりをインタビューして事例を積み重ねた<sup>7)</sup>。

臨死体験後の日常の中で辿るプロセスを検討することが研究の目的であるため、分析方法は、コーディング・データから現象のプロセス全体を検討していく修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ<sup>8)</sup> (以下、M-GTA と省略) を用いた。個々の臨死体験者の語りを取り上げるといよりも、M-GTA の分析に基づいて現象面に焦点を当てた。

### 2. 分析テーマ・分析焦点者

すでに研究の目的について述べたが、M-GTA での分析に入る前の手続きとして、射程となる現象について検討した。分析の射程となるのは、臨死体験という非日常的な体験をした人たちが、その後、非日常的体験の影響を受けながら、日常生活に復帰していく様相である。そこで、分析テーマ (分析の中心となるテーマ) を“日本人の臨死体験者が、臨死体験後に日常に復帰するプロセス”に絞り込んだ。分析の焦点の中心になる分析焦点者は、実際に臨死体験を体験した<sup>9)</sup> 日本在住の日本人である。

### 3. 対象者の選定と調査手続き

データ収集は、2008年3月から2014年12月の期間に実施した。知人の紹介などを介して臨死体験者の方々に会い、男性7名、女性11名の合計18名の臨死体験者のインタビュー調査を行うことができた。このうち、男性1名は臨死体験を二度しているため、調査事例は19事例となっている (Table 1.)。あらかじめ、臨死体験の内容、その後の変化、本人の生活背景についての質問項目を設定したインタビューガイドを用意し、それに基づいて半構造化されたインタビュー調査を実施した。インタビューにかかる時間は1時間半前後に設定したが、対象者の語りに応じて長時間に及ぶ場合もあった。調査対象者に録音許可が得られた場合はICレコーダーに内容を録音し、後で逐語録化した。録音の許可が得られなかった場合や録音機の不調などで録音ができなかった場合は、インタビューメモに基づいて、会話の内容を後で書き起こした。

臨死体験後に辿る過程（岩崎）

Table 1. 体験者と体験内容の概要

事例	性別	調査時の年齢	体験時の年齢	体験時の属性	きっかけ	体験内容の概要
A	男性	15歳	10歳	小学生	高熱が2週間継続	マントを着た顔のない女性とエレベーターに乗った。エレベーターが開くと、周囲は明るく、赤や黄色の花々が見えた
B	男性	41歳	28歳	メーカー研究員	心臓発作	倒れて真っ暗になり、気がつくとき自分の体を斜め上から見下ろしていた。「死ぬのはいやだ」と思った瞬間、真っ白な光に照らされ、自分の体に戻った
C1	男性	41歳	13歳	中学生	脳髄膜炎	自分が寝ている姿を見た。また、何度も天井の方向へ昇っていくことを繰り返した
C2	男性	41歳	26歳	映像制作者	肺水腫	観音様のような女性が招くかのように現れた。招きを断ると、女性が憤怒相になった
D	男性	28歳	6歳	幼稚園生	扁桃腺の手術	薄暗い光で照射されたドームのような部屋の天井から、ベッドに横たわる自分を見ていた
E	女性	62歳	49歳	パート勤務	交通事故	花が両脇に咲く白い舗装道路をずっと歩いていて、最後にお葬式の花輪のところで行き止まった
F	女性	48歳	26歳	主婦	出産	天井が落ち、強い光で周囲が真っ白になった。花畑とそこに流れる小川が見え、満面の笑みを浮かべた3人の人が立っていた。行こうとしていたら、母親の声で我に戻った
G	女性	61歳	20歳	大学生	高熱が継続	周りの人に話かけても反応がなかった。振り返ると、布団に寝ている自分の姿があった
H	女性	69歳	69歳	主婦	脳静脈瘤の手術	川の向こうで父が自分を呼んで手招きし、母は川のずっと下流で自分に背を向けて立っていた
I	男性	45歳	13歳	中学生	池で溺れる	池の底から出る光の中に入ると、太陽が6つある他の惑星に生まれ変わり、そこで一生を生きる体験をした
J	女性	57歳	30歳	小学校教師	急性腎不全	遠くに星のような光が輝く、宇宙空間のような奥行きのある暗がりの中に漂っていた
K	女性	73歳	30歳	主婦	卵巣のう腫の手術	水平方向に伸びる円錐型のトンネルに吸い込まれ、奥に行く手前で引き戻された
L	女性	80歳	67歳	自営業	急な血圧の上昇	一面輝くような花の咲く場所で、川の向こうから父に呼ばれ、伯父には来るなど言われた
M	女性	64歳	23歳	大学生	心臓発作	夜中にお手洗いから出たら、廊下の突き当たりのところが、金色に輝く坂道になっていた。音楽が聴こえ、よい香りが漂う中、坂道を登っていくと、突然真っ暗になった
N	女性	56歳	35歳	会社員	甲状腺機能亢進症	オレンジ色のポピーのような花が咲いている花畑に行った。行けども行けども誰にも会わず、「飽きたな」と思った頃に、下から呼ぶ声がした
O	女性	33歳	15歳	中学生	自動車事故	最初に人生を逆行する走馬灯体験をした。場面が切り換わり、長いトンネルの中を歩いていると、その先から当時好きだったバンドのメンバーに手招きされた。目を覚ました時に、真っ白な光が人や物へと分かれていくのを見た
P	男性	56歳	46歳	プロミュージシャン	抗生物質のアレルギー反応	周囲の人、遠方の人も含め、その時何を何を感じているかがわかった。明るくて暖かい色をした光が見え、そこに行きたくなった
Q	男性	41歳	21歳	大学生	腹膜炎の手術	身体が左右に横揺れした後に、気がつくと天井近くにいた。下には集中治療室のベッドに横たわる自分が見えた。体の痛みはなく、そのまま部屋の中でしばらく空中遊泳を楽しんだ
R	女性	52歳	30歳頃	主婦	インフルエンザによる高熱が継続	家の前のバス停からバスに乗ったところ、山の中のビルに着いた。ビルの外階段の踊り場から下を眺めると、キラキラ光る川の真ん中に、濃いブルーのラメの服を着た若い男が、岸にいる人の手を取って一人ひとり川の向こうに渡すのが見えた

注) C1とC2は2回臨死体験をした同一人物

#### 4. 倫理的配慮

本研究の調査<sup>10)</sup>は筆者が所属する大学院の指導教官らによって倫理面について検討され、承認を受けた上で、実施された。調査開始前に、調査対象者に対して、文書と口頭で調査の趣旨について事前説明を行った。そして、調査の内容は自身の臨死体験についてであること、調査に協力するかどうかは自由意志であり途中であっても拒否できること、拒否・中断の場合も不利益を被ることはないこと、インタビューの内容は研究目的にのみ使用すること、対象者個人が特定されないように発表の仕方に注意を払うこと、個人情報管理に努めること、などを十分説明した。また調査結果の報告を発表論文等の送付によって行うことを伝えた。その上で、調査対象者から文書と口頭で調査協力への同意を得た<sup>11)</sup>。また、対象者に不快感や苦痛を与えないように質問内容や言葉遣いにも十分配慮している。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 臨死体験全体の中での位置づけ

臨死体験後の臨死体験者の「日常への復帰」についての結果を検討する前に、臨死体験全体の中で「日常への復帰」がどのような位置づけにあるかを説明しておきたい。臨死体験全体のプロセスは、何らかの危機状態によってもたらされる【後退する日常】から始まって、日常の外側の世界を垣間見る【異なった世界への参入】へと移行し、何らかの引き戻しにあうなどの【異なった世界からの離脱】が生じ、【日常への復帰】へと至るといふ展開のプロセスが見いだされた<sup>12)</sup>(Figure 1.)。本研究では、臨死体験全体のプロセスの中の後半の部分に当たる【日常への復帰】に関する部分を扱っている。

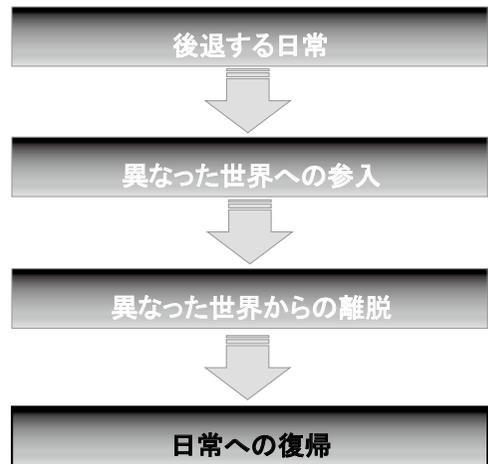


Figure 1. 臨死体験のプロセス全体の推移

#### 2. コーディングと結果図の作成

インタビュー・データの臨死体験後に関する部分を集中的に検討し、臨死体験後に生じた変化、人との関わり方、どのように日常生活を送ってきたか、臨死体験をどのように捉えているのかなどについて、ワークシートに具体的な対応箇所を記入した。その結果、42の概念を抽出し、続いて同系列の概念をまとめ、13のカテゴリーで括った。さらに、それぞれ2つのカテゴリーを束ねる上位カテゴリー2つを設定した。概念やカテゴリー同士の影響関係や推移の方向を矢印で図示し、結果図 (Figure 2.) に示した<sup>13)</sup>。

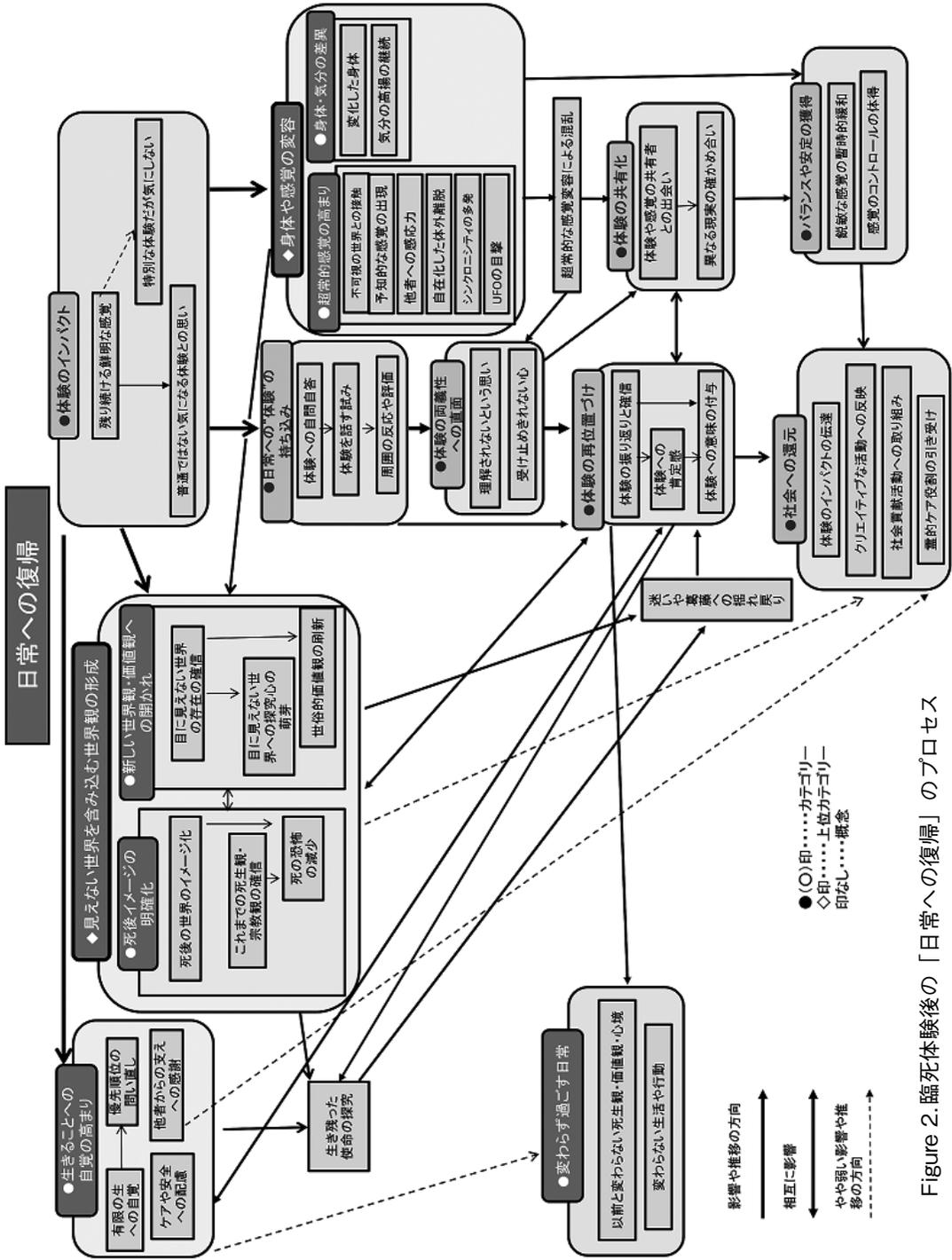


Figure 2. 臨死体験後の「日常への復帰」のプロセス

### 3. 臨死体験後の「日常への復帰」結果図の説明（ストーリーライン）

それでは、結果図に示したカテゴリ同士のつながりに触れながら、【日常への復帰】のプロセスを追っていく。〈 〉内は概念、{ }内はカテゴリ、[ ]内は上位カテゴリを表す。

まず最初に、プロセスの始点となる{体験のインパクト}から、{日常への“体験”の持ち込み}、そして{体験の再位置づけ}に至る流れをみていきたい。

臨死体験による〈残り続ける鮮明な感覚〉があり、多くは〈普通ではない気になる体験との思い〉を持つ。臨死体験後にこのような{体験のインパクト}が顕著であり、そこから、臨死体験者自身が〈体験を自問自答〉し、周囲には〈体験を話す試み〉を行い、その体験についての〈周囲の反応や評価〉を知るといった一連の行動が促され、{日常への“体験”の持ち込み}ということが生じる。「体験」を日常に持ち込む過程で、周囲の驚き困惑の反応に遭遇するなどし、臨死体験そのものの大部分は決してネガティブな体験というわけではなかったにもかかわらず、〈理解されないという思い〉や体験そのものを〈受け止めきれない心〉を抱える{体験の両義性への直面}が起きる。{体験の両義性への直面}後、〈体験の振り返りと確信〉が行われるなかで出来事が整理され、〈体験への肯定感〉が生じるなどし、あらたに〈体験への意味の付与〉がなされる{体験の再位置づけ}が起こる。{体験の両義性への直面}の後、臨死体験や同じような体験をした人や体験談などに巡り合う〈体験や感覚の共有者との出会い〉によって{体験の共有化}に至り、続いて{体験の再位置づけ}へと展開していく道筋がみられた。{体験の再位置づけ}は臨死体験後に時間をかけてゆっくりと行われることもあれば、繰り返し何度もなされることもある。

ここまでの流れでは、臨死体験という日常の

外側の体験を日常の中に持ち込み、周囲の反応や評価から日常でその体験の持つ両義性に直面するが、自分自身に鮮明に記憶され続けている体験を整理し、意味付け、位置づけていく展開の方向性がみられた。

続いて、臨死体験後に生じた変化に視点を向けていく。〈残り続ける鮮明な感覚〉に特徴づけられる{体験のインパクト}の影響下にある臨死体験者は、以前にはなかったさまざまな差異があることに気づく。死後の世界を思わせるような世界を垣間見たことによる{死後イメージの明確化}が生じる。{死後イメージの明確化}と、〈目に見えない世界の存在の確信〉を主な特徴とする{新しい世界観・価値観への開かれ}が連動しながら、[見えない世界を含み込む世界観の形成]をする。また、生命の危機状態を体験したことは、〈有限の生への自覚〉、人生の〈優先順位の問い直し〉、〈ケアや安全への配慮〉、〈他者からの支えへの感謝〉という内容を含む{生きることへの自覚の高まり}を生み出す。

また、{生きることへの自覚の高まり}と[見えない世界を含み込む世界観の形成]の両方からの影響を受けて、生命の危機状態を乗り越えて生き続けることができた自分の特別の役割や人生の目的を発見しようとする〈生き残った使命の探究〉が始まる。

こうした信念体系の変化とは別に、いつの間にか、〈不可視の世界との接触〉や〈予知的な感覚の出現〉をはじめとする{超常的感覚の高まり}と、持病の治癒などの身体的な変化や気分の高揚などを含む{身体・気分の差異}とが含まれる[身体や感覚の変容]が生じていることに気がつくこともある。

信念体系の変化も、身体や感覚の変容も、いったん{体験の再位置づけ}を経てそこで調整がなされる道筋がみられる。[見えない世界を含み込む世界観の形成]や〈生き残った使命の探

究）では、しばしば、〈迷いや葛藤への揺れ戻り〉へと向かうことがみられるが、徐々に迷いや葛藤が整理され、新たな意味が付与される〔体験の再位置づけ〕へと進んでいき、次の局面への展開を準備する。〔体験の再位置づけ〕は、プロセス全体をみたときに、臨死体験後に生じた変化が調整されていく展開の方向性と、日常に持ち込まれた体験への整理・意味付けの展開との結節点となっている。

〔身体や感覚の変容〕は、同じように〔体験の再位置づけ〕を経るものの、信念体験の変化とは異なる展開がみられる。〔身体や感覚の変容〕においては、しばしば〈超常的な感覚変容による混乱〉といった日常の中での困難を伴う事態が発生する。この混乱は、〔体験の両義性の直面〕へと向かうなどするが、戸惑うなかで、同じように超常的な感覚が生じている人と知り合う〈体験や感覚の共有者との出会い〉によって、体験や感覚について確認し合う機会が生まれ、〈異なる現実の確かめ合い〉をするなど〔体験の共有化〕が大きな役割を果たす。〔体験の共有化〕は、〔体験の再位置づけ〕とも連動しながら、やがて、超常的な〈感覚のコントロールの体得〉および〈鋭敏な感覚の暫時的緩和〉からなる〔バランスや安定の獲得〕に至る。

プロセスの最終段階をみると、臨死体験による変化をほとんど生じなかった場合や、変化があっても行動は以前と変わらない場合は、〔体験の再位置づけ〕を経た後、〔変わらず過ごす日常〕へと移行する。他方、信念体験の変化や身体や感覚の変容が生じた場合、主に調整過程を経た後に、〔社会への還元〕へと展開していく道筋がみられる。社会への還元は、臨死体験から学んだこと—「世界」の根本に触れた、死は恐ろしくないなどを他者に伝える〈体験のインパクトの伝達〉、臨死体験で得たことをアートや学術に取り込む〈クリエイティブな活動への反映〉、臨死体験からモチベーションを得

て社会活動に向かったり、他者への感謝が生じたことからボランティア活動に携わったりする〈社会貢献活動への取り組み〉、臨死体験後に生じた超常的な感覚を用いて他者の健康や心の問題の相談に応じるなどの〈霊的ケア役割の引き受け〉など、臨死体験以前にはみられなかった行動として表れる。

#### IV. 考察

##### 1. 日本人の臨死体験後のプロセスへの考察

日本人の臨死体験に関する研究では、これまで、主として臨死体験者に死の恐怖の減少や人生により深い意味を見出すなどの信念体験の変化、また比較的少数であるが超常的な感覚の出現などの事後効果が報告されてきた（立花、1994a/2000a, 1996/2001; ベッカー、1992; ベッカー・野堀、1992; 山村、1998）。本研究の結果でも、こうした信念体系の変化が起きていることが確認され、超常的な感覚の出現を主とするような身体や感覚の変容という側面もさらにはっきりと浮上した。また、「日常への復帰」のプロセスの中で臨死体験者が困難に直面する局面があることが明らかになった。

「日常への復帰」のプロセスを整理すると、二つの展開の方向が見出せる。一つは日常の外側の体験である臨死体験自体を、自問自答を重ねることや他者へ話す試みなどを通じて日常に持ち込み、日常の内部の価値基準にも照らしながら、体験を整理して意味づけていく展開の方向である。もうひとつは、信念体系の変化および、身体や感覚の変容といった臨死体験に続いて生じた状態に対して、意味づけや整理を伴いながら、バランスや安定を獲得する方向へと調整される方向性である。二つの流れは、〔体験のインパクト〕から出発し、〔体験の再位置づけ〕を結節点として、並行しながら展開していく。

臨死体験後の変化の展開のプロセスで注目されるのは、[身体や感覚の変容]は、[見えない世界を含み込む世界観の形成]をはじめとする信念体系の変化とは異なった展開を辿ることである。信念体系に関する変化の辿る展開では、{体験の共有化}や{体験の再位置づけ}による、体験の整理や意味付けの役割がクローズアップされた。それに対して[身体や感覚の変容]では、超常的な体験や感覚を確認し合う{体験の共有化}はもちろんのこと、超常的な感覚のコントロールを体得したり、鋭敏な感覚を次第に緩和するといった{バランスや安定の獲得}がみられた。[身体や感覚の変容]では、体験の整理や意味付けだけではなく、変容した鋭敏な感覚の緩和やコントロールの果たす役割の重要性がみられた。

「日常への復帰」のプロセスの最終では、{変わらず過ごす日常}に推移する道筋と、{社会への還元}に向かう展開とに分かれた。{変わらず過ごす日常}には、臨死体験による変化がほとんどない場合と、何らかの変化はあっても、行動や生活は変わらないという場合とがある。どちらの場合も、臨死体験後に日常に適応した状態であると考えられる。{社会への還元}では、臨死体験や事後効果による変化からモチベーションを得て、クリエイティブな制作活動に意識を向けたり、社会や他者に対して新たなはたらきかけをするなど、臨死体験以前とは異なった活動がみられる。そこでは、臨死体験という非日常的な体験を日常の中で消化して、日常に調和的に還元していく様相を捉えることができた。

以上を総合すると、臨死体験後の「日常の復帰」とは、臨死体験という日常の外側の世界の体験を日常に持ち込み、困難を調整し、出来事を整理して意味づけ、日常へ適応していくプロセスであると同時に、非日常的な世界に触れて得たことを調和的に日常へと還元していくプロ

セスでもあることが浮かび上がった。つまり、「日常への復帰」のプロセスは、臨死体験者が元の日常へと適応していく範囲にとどまらず、非日常的な体験を日常に還元することを通して新たな生き方を形成していくということが見出された。

## 2. 他研究との比較検討

日本人の臨死体験後の「日常への復帰」のプロセスの仮説モデルは、臨死体験後を扱った他の研究と比較検討するとどのように位置づけられるのであろうか。臨死体験後のプロセスが読み取れる研究と比較検討していきたい。

本稿で提示した日本人の臨死体験後の仮説モデルは、広く日本人の臨死体験後に登場する要素を網羅し尽くす<sup>14)</sup> までには至っていない発展段階にある。また、比較対照する先行研究は欧米の事例を扱った研究で、研究手法も異なり、臨死体験後のプロセスに特化した研究ではない。ここでは、日本と欧米における臨死体験後の本格的な国際比較を意図するわけではなく、あくまでも、先行研究にみる臨死体験後のプロセスと本論考の分析結果から導かれた仮説モデルのプロセスがどのくらい一致しているのか、相違点はどのようなところなのかについて検討を試みるにとどめる。

先行研究の内容については重複する部分もあるが、改めてプロセスに関する部分を読み込みながら検討していく。

### (1) 臨死体験後の統合化モデルとの比較検討

まず、臨死体験後のプロセスに関連する研究として、柿原が対称性ロジック<sup>15)</sup>の理論的枠組みを用いて説明した統合化モデル(柿原, 2008)との比較を行っていく。臨死体験後の日常意識と超常的な体験の統合化の過程で臨死体験者に生じるとされた3つの困難についてであるが(Figure 3.)、1. 自己の体験の絶対化(この

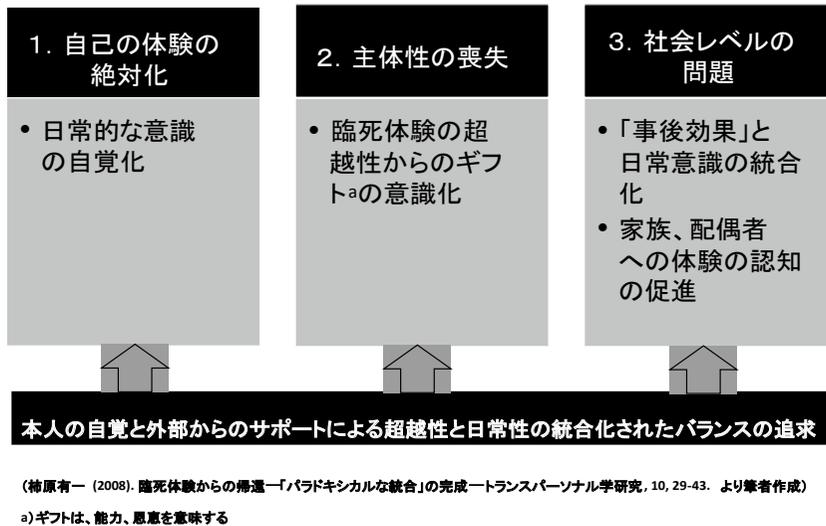


Figure 3. 臨死体験者が直面する困難の原因と克服

世の事柄への関心の喪失) については本研究の結果ではみられなかったものの、2. 主体性の喪失 (体験による変化からの圧倒)、3. 社会レベル上の問題 (周囲との軋轢) に相当するものは、本稿の臨死体験後のプロセスに提示した〈超常的な感覚変容による混乱〉や〈体験の両義性の直面〉といった局面にみられる。柿原によれば、事後効果の利益を再認識することにより、日常的な意識と超越的な体験との間にバランスが生じて双方が統合化へと向かうとしている。その点を本研究の結果と照合すると、〈社会への還元〉が、事後効果の利益を再認識してそれを社会に表現していく形をとった統合化に相当するとみることも可能であろう。柿原の臨死体験後の統合化モデルと、本稿の仮説モデルは、臨死体験者が抱える問題や日常意識と臨死体験の超越的な側面によってもたらされた変化との統合化の側面において、ある程度重なりをみせる。

## (2) アメリカの臨死体験者の6つの困難領域との比較

次に取り上げるのは、本稿の日本人の臨死体験後の分析と同様に、臨死体験者に直接、調査を行った一次データに基づいたアメリカでの研究である。国際臨死体験学会が臨死体験者向けに開催したリトリートの参加者を対象に行われたこの研究の調査では、全米15州からリトリートに参加した25人の参加者のうち、23人が回答し、臨死体験後にどのような困難 (challenge) に直面したかが報告された (Stout et al. 2006)。合計で115項目に及ぶ困難が提出され、そのうちの113項目は、6つの領域へとそれぞれ分類された。困難1～6の領域のすべてが臨死体験者に体験されるとは限らないし、必ずしもこの順番で体験されるわけではないが、段階的な進行を示唆しているとする (Figure 4.)。

提示された6つの困難領域ごとに、本研究で提示した臨死体験後のプロセスと比較を行ってみる。

	困難の種類	内容
困難1	現実の根本的な転換を扱う	予期せぬ突然の現実に対する転換を体験して、生、死、死後、身体、心、魂についての新しい概念を伴って戻ってくるが、臨死体験やそこから示唆されることを受け入れるのに多くの時間を費やす。
困難2	戻ってきたことを受け入れる	現実よりもリアルであった臨死体験の中で、純粋で無条件の愛を感じ、本当の故郷や究極の場所へ行っただと感じた。死への恐怖を強く否定し、時がくればそれを喜んで享受すると考えるようになる。再びそこに戻りたいとか、ホームシックを感じるなどする。
困難3	体験を分かち合う	自分で体験を受容するだけでなく、起きたことに対処したり、理解するために他人と分かち合うことが重要性を持った。体験を分かち合う時に、①言い表しがたい体験を表現する、②誰に打ち明けるかを選ぶ、③否定的な反応に対処する、④話す相手に関心を合わせる、といった困難に直面する。
困難4	新しいスピリチュアルな価値基準を世俗的な期待と統合する	新しいパラダイムと以前の人生とを適合させることを強いられる。生活の主要部分に摩擦が起こり、転職、離婚、所属宗教コミュニティからの遠ざかりが生じることもある。心身をケアする仕事に従事したり、臨死体験者の自助グループの活動に関わるようになる。
困難5	高まった感受性と超常的な能力を調整する	他人の強い感情やネガティブな行動に敏感になったり、五感の知覚の増大や、直感能力、ヒーリング能力、テレパシーなどの超常的な感覚が出現する。高まった感受性や超常的な能力をうまく生活やキャリアに組み込むこともあるが、どう扱ってよいかわからず能力を閉ざしたり、忙しさに紛らわすことを選択する場合もある。
困難6	目的を見出して生きる	この人生、この現実に戻ってきたのには理由があると信じている。自分には特別な目的があると感じているが、それが何かを明確に見出している人は少数である。臨死体験からのメッセージやそこから学んだことに基づいて生きてみたいと強く望み、自分の使命を遂行できないことを恐れる。

(Stout, Y.M., Jacquin, L.A., & P.M.H., Atwater (2006). Six major challenges faced by near-death experiencers. *Journal of Near-Death Studies*, 25(1), 49-62. より筆者作成) 注) 困難の種類1~6は原文に基づいて筆者訳出

Figure 4. 臨死体験者が直面する6つの主要な困難

・[困難1 現実の根本的な転換を処理する] についての検討

[困難1] は、予期せぬ現実に対する転換が起り、臨死体験やそこから示唆されることを受け入れるのに多くの時間を費やすという内容であるが、本稿で提示したプロセスにみられる{体験のインパクト}→{日常への“体験”の持ち込み}→{体験の両義性への直面}→{体験の再位置づけ}という展開に重なる。臨死体験のリアルで鮮明な感覚を伴うインパクトは臨死体験後の日常の中で当事者にも周囲にもどう理解したらよいのか、どう受けとめたらよいのかかわからないという困難をもたらすが、時間をかけながらそれを整理し、意味付け、位置づけていくという共通した方向性がみられる。

・[困難2 戻ってきたことを受け入れる] についての検討

[困難2] では、無条件の愛や究極の場所を感じた臨死体験によって、死の恐怖がなくなったことが挙げられている。この点については、本研究の結果での、〈死の恐怖の減少〉と共通していた。ただし、「またそこに戻りたい」、または「ホームシックを感じる」ということまではみられず、日本人の臨死体験後の分析結果では、「戻ってきたことを受け入れる」ことに困難が生じているとまでは言えない。この点では、本研究の結果とは相違をみせている。

・[困難3 体験を分かち合う] についての検討

本研究の結果では、「体験の分かち合い」に相当する局面がいくつかみられる。まず、家族、

友人、知人などに臨死体験を語ることを通して {日常への“体験”の持ち込み} を行う部分がそれに当たる。体験を話す試みは、ネガティブな周囲の反応や評価を引き出すこともあり、理解されないということにも直面する。一方、同じような体験や同様の感覚を持つ人と出会い、体験の分かち合いや確かめ合いをする {体験の共有化} にも、「体験の分かち合い」がみられる。{体験の共有化} は、体験の受容や困難の調整に大きな役割を果たしている。[困難3] は、本研究で提示したプロセスの中にもみられる。

・[困難4 新しいスピリチュアルな価値基準を世俗的な期待と統合する] についての検討

本研究でも、[見えない世界を含み込む世界の形成] など、信念体験においては新しい価値基準を伴う変化が生じていた。[困難4] では、新しいパラダイムと以前の人生を適合させる際の摩擦に言及しているが、本研究の提示したプロセスの中の {体験の両義性への直面} にそうした片鱗がみられる。新しい価値基準を伴った信念体系の獲得後に、他者へのケアに従事する仕事やボランティアに関わるようになる点は、本研究の臨死体験後のプロセスの中で、臨死体験から得たことを〈社会貢献活動への取り組み〉〈霊的ケア役割の引き受け〉などの形で {社会への還元} を行っていく展開とも共通する。[困難4] は、本研究の結果と重なる。

・[困難5 高まった感受性と超常的な能力を調整する] についての検討

[困難5] では、臨死体験後の感受性や超常的な感覚の高まりと、それによって生じる問題について言及されている。本研究の結果においても、超常的な感覚の高まりが指摘されたが、そこから〈超常的な感覚変容による混乱〉と {体験の両義性への直面} へと向かうことがみられた。こうした困難の解消には、{体験の共有化} や {体験の再位置づけ} が大きな役割を果たし、それを経ることによって {バランスや安定の獲

得} へとつながっていった。[困難5] では、最終的に高まった感受性と超常的な能力を職業などにうまく組み込むケースもあることにも触れているが、本研究でも、超常的な感覚を〈クリエイティブな活動の反映〉や〈霊的ケア役割の引き受け〉という形で、日常生活の中に還元していく道筋がみられた。[困難5] は、本研究の臨死体験後のプロセスでみられた様相と、非常に共通性が高い。

・[困難6 人生の目的を見出して生きる] についての検討

日本人の臨死体験後においても、〈生き残った使命の探究〉ということが生じていた。また、[困難6] では、臨死体験者が自分の役割や目的を具体的に見出すのに時間がかかることについて述べられているが、本研究でも同様に臨死体験者が自分の特別の役割や目的の探究の末にこれだと思えるものに到達したり、役割や目的に逡巡を重ねて〈迷いや葛藤への揺れ戻り〉を経験することがみられた。[困難6] は、本研究とも一致をみる。

以上のように、6つの困難領域についてそれぞれ検討を行ったが、[困難2 戻ってきたことを受け入れる] の一部を除いて、本研究で示した臨死体験後のプロセスにおいて直面する事柄と多くの点で共通性がみられた。また、それぞれの困難領域で、[困難1 現実の根本的な転換を処理する] と [困難3 体験を分かち合う] については、臨死体験やそれによってもたらされたことを整理し、意味づけていく展開の方向性が、[困難4 新しいスピリチュアルな価値基準を世俗的な期待と統合する]、[困難5 高まった感受性と超常的な能力を調整する]、[困難6 人生の目的を見出して生きる] には、臨死体験によってもたらされた変化を調整して、日常生活にそれを還元していこうとする展開が見られる。

また、日本人の臨死体験後の分析結果と同様に、信念体系の変化と身体や感覚の変容では伴う困難に違いがみられた。信念体系の変化に関連する困難では、体験やそれに伴う変化への受容・意味付けや周囲との葛藤の調整が問題の中心を占めるのに対して、身体や感覚の変容とそれに伴う困難に相当する〔困難5 高まった感受性と超常的な能力を調整する〕では、変容した身体や感覚そのものへの調整が焦点となっており、困難の性質を異にしているという点についても、一致していた。6つの困難領域からは臨死体験後のプロセスの展開が垣間見られるが、以上検討したように、本研究の結果と重なる部分が非常に多く見出されると言える。

### (3) 比較検討の小括

臨死体験後のプロセスに関連した先行研究との検討の結果、本研究で提示した日本人の臨死体験後のプロセスの仮説モデルは、生じた変化、抱える困難、困難への調整の試み、社会や他者に向けた新たな活動の開始、といった点で一致をみている。特にアメリカでの「臨死体験後に直面する困難」についての調査研究の結果とは細かな点についても多くの部分一致している。

一方、部分的な相違点もみられた。「自己の体験の絶対化（この世の事柄への関心の喪失）」（柿原, 前掲）という体験への没頭や、臨死体験から「戻ってきたことを受け入れることができない」（Stout et al., *ibid.*）といった日常の否定は、本研究での日本人の臨死体験者には見当たらなかった。日本人の臨死体験の先行研究の事例を検討しても、臨死体験の素晴らしさに没頭して日常から遠ざかったという例は報告されていない（松谷, 前掲; 立花, 前掲; ベッカー, 前掲; ベッカー・野堀, 前掲; 村山, 前掲）。臨死体験がたとえ素晴らしいものであったとしても、その体験の超越性を想起することに没頭して、日常を完全に否定しきることがないという

点は、日本人に特有なものである可能性が浮上する。

たとえば、立花隆は、日本人とアメリカ人の臨死体験の内容の大きな相違点として、超越的・宗教的存在が出現した時に、それらの存在と臨死体験者との間に生じるコミュニケーションの仕方の違いを指摘している。すなわち、日本人の臨死体験に出現する超越的存在は現れて去っていただけであるのに対し、アメリカ人の臨死体験では超越的な存在は無限の愛や深い考えを伝えてくるものとして出現する（立花, 1994b/2000b, pp.88）。これは、日本とアメリカでは超越的なものへの関与の仕方の相違から生じていると推測される。臨死体験後、臨死体験での超越性を帯びた世界を理想化してそれをひたすら憧憬するような考え方が日本人には生まれにくい理由にも、超越的なものに対する関与の相違が関係している可能性がある。いずれにしても、こうした点が日本人の臨死体験後の特有性であるのかどうか、なぜそのようなことが生じているのかについては、稿を改めて検討していきたい。

以上のように臨死体験後のプロセスに関連する他研究との比較検討し、多くの点で本研究の分析結果と一致をみた。それによって、本稿で提示した臨死体験後のプロセスは、ある程度、臨死体験者に共通してみられることが示されるに至った。他方で、アメリカの研究結果と部分的に相違する点があり、日本人の臨死体験後のみ見られる傾向性を検討する余地も残された。

## V. 結論

### 1. まとめ

日本人の臨死体験後の「日常への復帰」は、臨死体験という日常の外側の世界の体験を日常に持ち込み、整理・意味づけを行いながら体験

を位置づけていく適応のプロセスであると同時に、臨死体験から生じた信念体系の変化や身体・感覚の変容を調整しながら、日常の外側の体験を消化して調和的に日常へと還元していくプロセスでもある。本稿では、これまで検討されてこなかった日本人の臨死体験後のプロセスについての仮説モデルを提示することができ、臨死体験を総体的な視野から捉えていくことに一歩近づいた。

さらに、本稿での日本人の臨死体験後の分析結果と主にアメリカの臨死体験事例に基づいた臨死体験後の研究を比較検討したところ、臨死体験後には共通して直面する困難のパターンや辿るプロセスがみられた。臨死体験後に生じた変化が、信念体系に関する変化なのか、身体や感覚の変容なのかによって、伴う困難が異なるといった点についても共通性が認められた。結果として、本研究で提示した臨死体験後のプロセスは先行研究での臨死体験者の体験に重なる部分が多く、このようなプロセスは臨死体験者にある程度共通していることが示唆された。それによって、本稿の仮説モデルを今後も継続的に検討していく有効性について見通しを持つことができた。

## 2. 今後の課題

今後の課題であるが、まず日本人の臨死体験後のデータのさらなる集積が求められる。本稿では19事例を分析して仮説モデルを提示したが、日本人の臨死体験者の臨死体験後に直面する局面をすべて網羅したとは言いきれない。今後は、本研究の調査データにはまだない種類の事例—たとえば「ネガティブなタイプの臨死体験」<sup>16)</sup>—などもさらに収集し、データとして追加していくことが必要である。多様なデータを包含することで、臨死体験後のプロセスをさらに包括的に提示することが可能となる。

ところで、本研究のインタビュー調査は、過

去の出来事を回想的に振り返って語ってもらうレトロスペクティブな調査手法をとっている。そのため、プロスペクティブな調査とは異なり、対象者の置かれている状況、出来事、体験、またその時期について厳密な正確性をもって描き出すことはできにくい。また、対象者はそれぞれ別々の時期に臨死体験をし、インタビューまでの体験経過年数もそれぞれ異なるなど、一定条件にはなっていない。よって、事後効果の発現の程度もそれぞれ異なり、それについての語りも異なること、臨死体験からの経過年数が長ければ初期に体験した困難などは忘れ去られて語られない部分があり、データに偏りを生じることが想定されるという限界もある。ただし、本研究では臨死体験後の厳密な時系列に沿って正確な出来事を描くことを目指しているわけではなく、主要なポイントとなる出来事や体験がどうつながりあって展開していくのかというプロセスの全体の大きな枠組みを描きだすことを重視している。それゆえ、さまざまな条件の対象者の語りのデータを充実させることによってデータの偏りを是正し、最終的には概念を飽和させて、プロセスに関しての洗練された仮説モデルを示してきたいと考えている。

上記のように日本人の臨死体験後の包括的で洗練された仮説モデルを形成するとともに、さらには、他文化の臨死体験後を扱った研究と比較検討をさらに進めていきたい。本稿で先行研究との比較検討を行った結果、自己の体験の絶対化による日常への無関心、および臨死体験者が戻ってきたことを受け入れられないという日常への否定感については、日本人の臨死体験者には見出されず、この点はアメリカの研究結果と異なっていた。日常とある程度の接点を持ち、日常と断絶することなく、「日常への復帰」を辿っているという点は日本人の臨死体験後の特性である可能性が浮かび上がった。こうした点について、文化的背景まで含めてあらためて検

討していきたいと考えている。

### 3. おわりに

臨死体験後のプロセスを検討することは、臨死体験に限らず、日常の外側の領域に触れて拡大した自己意識や感覚や世界観を日常の中でどう扱うのかという問題に通じる。臨死体験後のプロセスの仮説モデルを示すことを通して、広く非日常的な体験の後に生じるこの問題にアプローチする一助となればと考えている。

#### 注

- 1) 超常的、神秘的な要素を帯びるなど、通常の観点から説明しにくい体験は、変則的体験 (anomalous experience) と総称される。変則的体験自体は、臨死体験のような危機状態に限定されず、さまざまな状況で生じる。こうした体験は心理学のメインストリームから無視されたり、軽視されたりする傾向が長く続いたが、近年、改めて検討しようという動きが生じている (Candeña, Lynn & Krippner, 2000)。
- 2) 臨死体験研究の中心的な役割を果たしてきたグレイソンは、臨死体験を次のように定義する。「臨死体験とは、超越的で神秘的な要素を帯びた深い心理学的な出来事であり、典型的には死に近づいた人、もしくは生理学的または情緒的な強い危機の状況にある人に起こる。それらの要素は、個人の自我を越えたという感覚、神もしくは高次元の原理と一体になったという体験、といった言い表しがたい内容を含んでいる」[筆者訳] (Greyson, 2000, pp.315-316)。
- 3) 本稿は、2015年2月28日に開催されたトランスパーソナル心理学・精神医学会第15回学術大会での筆者の口頭での研究発表の内容に沿ってまとめ、一部を加筆・修正した。
- 4) 超常的能力が客観的に計測されたというわけではない。あくまで本人らの体験としての報告に基づく。
- 5) アトウォーターによれば、臨死体験による主要な事後効果のパターンとして、(1) 愛などの感情や意識を特定の個人に向けることがなくなる (すべての人に愛の感情や意識を向ける) [( )内は筆者による]、(2) 境界、規則、限定を認識したり理解できなくなる、(3) 時間概念や過去や未来など時系列への言及を理解するのが困難になる、(4) 直感やサイキック能力がはたらくようになるなど、感覚の拡大や増大が起きる、(5) 現実から距離を置き客観的になり、現実に対する見方が転換し変化する、(6) 身体と自己との同一化を切り離し、身体的な自己へのこれまでと異なった意識が生じる、(7) 他の人が使う言葉の表現を理解するのが難しくなり、コミュニケーションや関係性に困難が生じる、という点が報告されている。こうした事後効果が落ち着くには数年がかかるとしている (Atwater, 1988/1998, 1994/1997)。尚、臨死体験後に困難を生じるというのは、臨死体験の後に何らかの病理を発症するというのではないことを付け加えておく。
- 6) 調査では、臨死体験や臨死体験後に生じた出来事をどう理解すればよいかわからなかったということが、しばしば臨死体験者の苦悩を助長させていたということがみられた。本研究の結果が、仮説モデルの段階であることを断った上で、臨死体験をした当事者に参考にしてもらえることを願っている。調査に協力いただいた臨死体験者の方々へは、結果をフィードバックすることはもちろんであるが、学会誌など公の場で研究結果を発表することによって、こうした情報を必要とする人々に、開示されることが重要だと考えている。
- 7) スノーボールサンプリングでは、指導教官らに体験談を寄せてきた方々、筆者の知人や友人らに紹介していただいた方々、筆者の直接の知人で臨死体験をした方を対象者として選定した。
- 8) 1960年代にバーニー・グレーザーとアンセルム・シュトラウスによって編み出されたグランデッド・セオリー・アプローチは、主に看護学の分野で発達してきた質的研究方法である。この方法の特色としてはインタビューやフィールド・ワークで得られた情報を文章化してローデータを作成し、ローデータから概念やカテゴリーをコードリングするという作業を通じて、仮説的な理論を一から生成していくというものであった。グランデッド・セオリー・アプローチは仮説生成的な研究手法として優れているものの、切片化と呼ばれるコーディングの方法が複雑で限られた時間の中で研究していくには時間がかかり過ぎるのが難点であった。ローデータの内容を損わずにコーディングの手法を簡単にし、現場で起きている現象を素早く分析できるというより実践に適しているという点が、修正版グランデッド・セオリー・アプローチの特長である (木下, 2003, 2007)。
- 9) どのような体験を臨死体験とするかについては、以下の基準に沿っている。臨死体験は、研究初期には限りなく死に近づいていたことが必要条件とされたが、臨床的には死に近づいたとは言えないようなケースでも、臨死体験に特徴的な体験が出現していることが明らかにされている (Owen, Cook & Steavenson,

- 1990)。こうしたことを踏まえて、グレイソンは「典型的には死に近づいた人、もしくは生理的または情緒的に強い危機状態にある人に起こる」とし、またその内容については、「個人の自我を超えたという感覚、神もしくは高次元の原理と一体になったという体験、といった言い表しにくい内容を含んでいる」としている（Greyson, *ibid.*）。本研究は、①死に近づいたとまでは言えなくても何らかの危機状態で体験されること、②体験内容については、ムーディの抽出した臨死体験の15要素（Moody, 1975/1989a, 1977/1989b）のいずれかに該当するか、もしくは、グレイソンの臨死体験尺度（認知的、情緒的、超常的、超越的特徴の4つの面から検討する尺度）（Greyson, 1983）に合致することを要件として、臨死体験に該当するかどうかの識別を行った。
- 10) 本研究は、臨床の場で障害や疾病を持つ人を調査対象とする臨床研究ではなく、調査実施時に一定以上の健康状態が保持されている人々を対象とした調査研究である。対象者や調査内容に基づいた倫理的な配慮を行っている。
- 11) 未成年の調査対象者にはあらかじめ保護者の承諾を得た上で、本人と保護者両方に事前説明を行い、両方から調査への協力の同意を得ている。
- 12) 2014年1月に、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる研究を扱う実践的グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）研究会の第66回定例報告会において、筆者は臨死体験全体のプロセスについて発表した。研究会のスーパーバイザーであった山崎浩司先生（信州大学准教授）からコメントと助言をいただき、臨死体験自体と臨死体験後のプロセスを分けてそれぞれ検討するに至った。
- 13) 本研究の臨死体験後の「日常への復帰」プロセスのコーディングに際しては、指導教員であり、臨死体験に造詣の深い蛭川立先生（明治大学准教授）からコーディング・チェックを受けた。
- 14) M-GTAによる仮説生成型のモデルは、これ以上新たな重要な概念が生成されなくなった状態である「理論的飽和」に達した時に完成するとされる。
- 15) 柿原は、中沢新一が『対称性人類学』の中で提示した「対称性のロジック」の枠組みに依拠している。すなわち、人間の意識はアリストテレス的な論理的弁別性を有する論理が優勢である通常意識と、それとは異なって神話や夢の中で展開されるような論理である「対称性ロジック」のはたらきからなる無意識の両方から構成されているとする立場に立ち、臨死体験はこのような人間の意識のバイロジック性が表面化する出来事であると捉えている。「対称性ロジック」は、1. 自他の区別を行わず、2. 時間の限定から外れており、3. 空間も三次元に限定されず、

4. 全体と部分とが一致する、といった特徴を有するとされる（中沢, 2004, pp.204-205）。

- 16) ネガティブな臨死体験とは、“Distressing near-death experience” と呼ばれるタイプの体験である。こうした体験は臨死体験全体の中では割合は少ないものの、報告されている。グレイソンとブッシュは共著で、ネガティブな臨死体験を次の3つに分類している。①内容は光、存在、真理、光景など、一般的な臨死体験と類似するが、体験者から、ぞっとする、相容れないものとして受け取られる体験、②完全な無、究極の孤独、無存在として受け取られる体験、③いまわしい環境や、ぞっとする存在や、審判や苦痛によって特徴づけられる伝統的な地獄の様相として描かれる、典型的な地獄的なものとの遭遇の体験（Greyson & Bush, 1992）。日本人の事例では、立花隆がインタビューを行った臨死体験者のうち、ネガティブな臨死体験をしていたケースが数例みられる（立花, 1994a/2000a, pp.86-95, 1996/2001, pp.269-282）。

#### 引用文献

- Atwater, P.M.H. (1998). *Coming back to life: Examining the after-effects of the near-death experience*. North Carolina: Transpersonal Publishing. (Original work published 1988, New York: Dodd Mead)
- Atwater, P. M. H. (1994). *Beyond the Light: The mysteries and revelation of near-death experience*. New York: Avon. (アトウォーター, P. M. H. 角川春樹 (訳) 1997. 光の彼方へ ハルキ文庫 (翻訳本初版, 1995, ソニーマガジンズ))
- ベッカー, カール (1992). 死の体験—臨死現象の探求 法蔵館
- ベッカー, カール・野掘拓路 (1992). 死ぬ瞬間のメッセージ: ある少年の臨死体験 読売新聞社
- Candeña, E., Lynn, S.J., & Krippner, S. (2000). Introduction: Anomalous experience in perspective. Candeña, E., Lynn, S.J., & Krippner, S.C. (Eds.) *Varieties of anomalous experience: Examining the scientific evidence*. Washington, D.C.: American Psychological Association, 3-21.
- Flynn, C.P. (1982). Meanings and implications of NDEr transformation: Some preliminary findings and implications. *Journal of Near-Death Studies*, 2, 3-13. (フリリン, C. P. (1991). 臨死体験者の意味の変容 グレイソン, B. & フリン, C. P. (編) 笠原敏雄 (監訳) 臨死体験—死と生の境界で人はなにを見るのか— 春秋社, pp.330-346.)
- Furn, B.G. (1987a). Adjustment and the near-death experience: A conceptual and therapeutic model. *Journal of Near-Death Studies*, 6 (1), 4-19.

- Furn, B.G. (1987b). Cross-cultural counseling and the near-death experience: Some Elaborations. *Journal of Near-Death Studies*, 6 (1), 37-39.
- Greyson, B. (1983). The near-death experiences scale: Construction, reliability, and validity. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 171 (6), 369-375.
- Greyson, B. (2000). Near-Death Experience. Candeña, E., Lynn, S.J., & Krippner, S.C. (Eds.) *Varieties of anomalous experience: Examining the scientific evidence*. Washington, D.C.: American Psychological Association, 315-352.
- Greyson, B. & Bush, N.E. (1992). Distressing near-death experience. *Psychiatry*, 55, 95-110.
- Greyson, B. & Harris, B. (1987). Clinical Approaches to the Near-Death Experiencer. *Journal of Near-Death Studies*, 6 (1), 42-50.
- Grof, S. & Grof, C. (1989). Spiritual emergency: Understanding evolutionary crisis. Grof, S. & Grof, C. (Eds.) *Spiritual emergency: When personal transformation becomes a crisis*. New York: Penguin Putnam Inc. 1-26.
- Grof, C. & Grof, S. (1990). *The stormy search for the self: A guide to personal growth through transformational crisis*. California: Jeremy P. Tarcher. (グロフ, C. & グロフ, S. 安藤治・吉田豊 (訳) (1997). 魂の危機を越えて—自己発見と癒しの道 春秋社)
- 岩崎美香 (2013). 臨死体験による一人称の死生観の変容—日本人の臨死体験事例から— トランスパーソナル心理学/精神医学, 13 (1), 93-113.
- 柿原有一 (2006). 臨死体験における自己実現と意識状態—パラドクス肯定のために トランスパーソナル学研究, 8, 73-90.
- 柿原有一 (2008). 臨死体験からの帰還—「パラドキシカルな統合」の完成— トランスパーソナル学研究, 10, 29-43.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い 弘文堂
- 木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂
- Lommel, P. van, Wees, R. van, Mayers, V., & Elfferich, I. (2001). Near-death experience in survivors of cardiac arrest: A prospective study in the Netherlands. *Lancet*, 358, 2039-2045.
- 松谷みよ子 (2003). 『現代民話考 [5] 死の知らせ・あの世へ行った話』ちくま文庫 (初版, 1986, 風立書房)
- Moody, R. A. (1975). *Life after life: the investigation of a phenomenon—Survival of bodily death*. Mockingbird Book. (ムーディ, R. A. 中山善之 (訳) (1989a). かいまみた死後の世界 評論社)
- Moody, R. A. (1977). *Reflections on Life After Life*. Harrisburg, PA: Stackpole Books (ムーディ, R. A. 駒田明子 (訳) (1989b). 『続 かいまみた死後の世界』評論社)
- 中沢新一 (2004). 対称性人類学 カイエ・ソバージュ V 講談社選書メチエ
- Noyes, R. (1982). The human experience of death or, what can we learn from near-death experiences? *Omega*, 13, 251-259. (ノイエス, R. (1991). 人間の死体験—臨死体験から何を学ぶか グレイソン, B. & フリン C. P. (編) 笠原敏雄 (監訳) 臨死体験—死と生の境界で人はなにを見るのか— 春秋社, pp.316-329.)
- Owen, J.E., Cook, E.W. Steavenson, I. (1990). Feature of “near-death experience” in relation to whether or not patients were near death. *Lancet*, 336, 1175-1177.
- Ring, K. (1980). *Life at death: A scientific investigation of the near-death experience*. New York: Coward, McCann & Geoghegan. (リング, K. 中村定 (訳) (1981). 『いまわのきわに見る死の世界』講談社)
- Ring, K. (1984). *Heading Toward Omega: In Search of the Near-Death Experience*. New York: William Morrow and Company Inc.
- Sabom, B. M. (1982). *Recollections of Death: A medical investigation*. Harpercollins. (セイボム, M. B. 笠原敏雄 (訳) 2005. 「あの世」からの帰還—臨死体験の医学的研究— 日本教文社)
- Stout, Y. M., Jacquin, L. A., & P. M. H., Atwater (2006). Six major challenges faced by near-death experiencers. *Journal of Near-Death Studies*, 25 (1), 49-62.
- 立花隆 (2000a). 臨死体験 (上) 文春文庫 (初版, 1994a, 文藝春秋社)
- 立花隆 (2000b). 臨死体験 (下) 文春文庫 (初版, 1994b, 文藝春秋社)
- 立花隆 (2001). 証言・臨死体験 文春文庫 (初版, 1996, 文藝春秋社)
- 山村尚子 (1998). 臨死体験—終末医療における意義の検討— 日本老年医学会雑誌, 35, (2), 103-115.
- 柳田國男 (1989). 遠野物語 柳田國男全集 4 ちくま文庫 (初版, 1910)

#### 謝辞

お忙しい中インタビューに協力いただき、臨死体験と臨死体験後についてお話しくださった臨死体験者の方々、また臨死体験者の方々をご紹介くださった皆様に、心から感謝申し上げます。そして、M-GTAでの分析について助言をいただいた山崎浩司先生をはじめとするM-GTA研究会の先生や参加者の方々、臨死体験後の展開について貴重なアドバイスをいただいた指導教官の蛭川立先生に、お礼を申し上げます。最後に、本

稿の草稿をトランスパーソナル心理学・精神医学会第15回学術大会で発表した際に、コメントをいただいた方々にもあわせて謝意を表します。

#### 抄録

臨死体験は臨死体験者にその後もさまざまな影響を与えることが、主に欧米の臨死体験研究の分野で示されてきた。本研究では、ほとんど研究されてこなかった日本人の臨死体験後の「日常への復帰」のプロセス全体を、19事例の調査データを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて検討した。臨死体験後には、非日常的な体験を整理し、意味づけ、調整して日常に適応していくことや、さらには臨死体験とその影響を消化しながら社会の中で新たな活動を始めることがみられた。「日常への復帰」のプロセスは、日常への適応のプロセスであると同時に、非日常的な体験を調和的に日常に還元していくプロセスであることが浮かびあがった。

日本人の臨死体験後の分析結果は、アメリカの事例に基づいた臨死体験後の研究と、事後効果、臨死体験者の困難、プロセス展開といった点で重なりをみせ、臨死体験後にある程度共通したパターンがある可能性が示唆された。

#### Abstract

Existing research, mainly conducted in the United States and Europe, shows that near-death experience can exert various aftereffects on near-death experiencers. This article examines the whole process of rehabilitation from near-death experience experienced by near-death experiencers in Japan. Data was collected through qualitative interviews with nineteen informants who have near-death experience and analyzed by a modified grounded theory approach. Analysis reveals that rehabilitation is a process of adaptation and harmonious reduction of outcome from near-death experiences to the everyday life. Informants reflected such an extraordinary experience, giving new meaning to this experience, and some of them began new activities. Findings overlap with those of American studies and suggest the possibility that there may be a universal pattern of near-death experience to some extent.

**Key words:** near-death experience, aftereffects, rehabilitation after near-death experience, reduction of outcome into the society